旧制京都二中と再戦

創立150周年を記念した硬式野球部の招待試合が6月1日に秋田市のこまちスタジアムで開かれた。秋田中時代の1915（大正4）年、第1回全国中等学校優勝野球大会（現在の全国高校野球選手権大会）で決勝を戦った京都二中の流れをくむ鳥羽高を招き、白熱した戦いを繰り広げた。

第1回大会は大阪の豊中グラウンドで全国から10校が参加。東北代表の秋田中は準々決勝で三重の山田中（現宇治山田高）を9―1、準決勝で優勝候補の早稲田実業（東京）を3―1で破った。京都二中との決勝は七回に1点を先取したが八回に追いつかれた。迎えた延長十三回1死二塁、クロスプレーでの生還を許し1―2でサヨナラ負け。深紅の大優勝旗にはあと一歩届かなかったが、秋田県勢の最高記録として残っている。

復刻ユニホームで始球式

150周年の節目に歴史的な意義のある記念試合をしたいと考え、対戦を申し込んだところ快諾を得た。鳥羽高の松下浩司監督は「こちらとしても大変ありがたい話。甲子園決勝の気持ちで戦い、当時をほうふつとさせるような試合にしたい」と語った。

当日は吹奏楽部と応援団を含めた全校生徒が応援に詰めかけ、紫色のメガホンを手にスタンドを彩った。一塁側と三塁側に分かれて両校に声援が送られ、バックネットでは野球ファンらが熱い視線を送った。

開始式では銭谷眞美同窓会長が「フェアプレーの精神と全力プレーでいい試合を展開してほしい」と挨拶。始球式では秋田高の柘植敏朗校長、鳥羽高の宮島勇二校長が、それぞれ第1回当時の復刻ユニホームに身を包んで務めた。

試合は両エースの好投で緊迫した展開に。秋田は鳥羽のサウスポーから幸先よく2点を先制。六回に同点とされたが、その裏にすぐさま勝ち越した。秋田の岩谷信太郎投手（3年）は安打を浴びたが、ホームを踏ませない気迫の投球で1失点完投。4―1で勝利を収めた。

試合後、秋田高の長澤晃汰主将（3年）は「150年の伝統をかみしめてプレーした。また互いに甲子園で戦えるよう頑張りたい」、鳥羽高の平澤拓海主将（3年）は「秋田は投手を中心に粘り強いチームだった。第1回大会決勝の相手としてふさわしい試合ができたと思う」と健闘をたたえ合った。

終了式では柘植校長が「延長十三回で決着をした当時に負けない素晴らしい試合だった」と賛辞を贈った。両校は1980年代にもOB戦と現役戦を行っており、秋田高が甲子園に出場した際は京都二中OBが激励に訪れたこともあった。今回もグラウンド整備の際に両校選手が談笑する場面や、試合後は打ち解けた様子で記念撮影する姿が見られた。これを機にますます両校の交流が深まることを願いたい。

グラウンド整備で談笑する両校の選手

力投した秋田高のエース岩谷投手

二回に秋田高が先制し盛り上がる応援団

試合後に両校で記念撮影